

# 小学校家庭科と生活力

赤塚 朋子・福田 真由

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第9号 別刷

2022年8月31日



# 小学校家庭科と生活力<sup>†</sup>

赤塚 朋子\*・福田 真由\*\*

宇都宮大学共同教育学部\*

宇都宮市立国本中央小学校\*\*

世界的な COVID-19 の感染拡大は、子どもの生活に大きな影響を与えた。休校や緊急事態宣言の発令により、在宅時間が増加し、家事に触れる機会が増え、子どもの生活力が求められている。このような現状の中、子どもにとって家庭科の授業は生活力を身に付ける大切な機会である。本稿では、小学校家庭科と生活力に焦点化して、生活力とは何かを小学校家庭科との関りから明らかにするとともに教材開発を目的とした。

キーワード：小学校、家庭科、生活力、教材

## 1. はじめに

現在は「変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の時代であり、先行き不透明で将来の予測が困難な未来」（文部科学省「次期教育振興基本計画（令和5（2023）年度～令和9（2027）年度）諮問の概要」）にある。また、日本は多くの社会問題を抱えており、子どもを取り巻く課題も深刻化している。子どもの貧困率は2018年の最新の数字は13.5%（「国民生活基礎調査」2019年 厚生労働省）であるが、経済協力開発機構（OECD）が15年に改定した新基準では14.0%で先進国の中でも非常に高い数値である。また 児童相談所が対応した児童虐待相談対応件数は全国で205,029件（2020年 厚生労働省）に上り、増加傾向にある。

さらに、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行は、子どもの生活に大きな影響を与えた。休校や緊急事態宣言の発令により、在宅時間が増加し、家事に触れる機会が増えている。子どもだけで過ごす場合もあり、子どもの生活力が求められている。このような現状の中、子どもにとって家庭科の授業は

生活力を身に付ける大切な機会である。

そこで、本稿では、家庭科教育の基盤を担う小学校での家庭科と生活力に焦点を合わせて、これまでの生活力に関する先行研究を整理し、具体的に小学校家庭科を通じて生活力を身に付けるための教材開発を目的とした。

## 2. 子どもを取り巻く状況

### (1) コロナ禍と子どもの貧困

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、収入が減少したり、失業したりする人が出てきた。そのほとんどは、非正規雇用で働く女性に多い。ひとり親世帯への影響はとて大きく、「学費が払えない」や「食費が足りず、食事を一食にしている」などの課題が多くみられる<sup>1)</sup>。そのため、子どもの学校用品や衣服等に使えるお金がすくなくなり、必要なものが手に入らない子どももいると考えられる。学校の臨時休業に際して、学習のデジタル化が進められた。デジタル化されたことで、学校や塾ではなく、家庭で学習機会が確保でき、さらに自宅に居ながらも外部と交流することができるようになった。しかし、貧困世帯やコロナ禍で収入が減少した世帯では、学習に必要な端末を用意できなかったり、インターネット環境を十分に整えたりすることが困難である可能性が高い。そういった家庭の子どもは、十分に学習することができない。さらに子どもの教育格差が広がってしまうことが懸念されている。

「新型コロナウイルスの影響を受けた生活困窮世

<sup>†</sup> Tomoko AKATSUKA\*, Mayu HUKUDA\*\* : Elementary School Home Economics Education and Living Ability

Keywords: elementary school, home economics education, living ability

\* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

\*\* Kunimotochuo Elementary School

(連絡先: akatsuka@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

帯の子どもに関する調査報告書<sup>2)</sup>では、「家庭の経済状況に与えた影響」や、「通信環境の課題」、「学習や進路への不安」、コロナ禍での困りごとについてまとめている。「家庭の経済状況に与えた影響」については、生活困窮世帯の73%が「所得が減少した、減少する可能性がある」と回答し、感染拡大は多くの家計に影響を与えていることがわかる。「通信環境の課題」については、生活困窮世帯の子どもの4人に1人が自由にインターネットを利用できないことが分かった。さらに、およそ2人に1人の子どもは、パソコンやタブレットを自由に使えない状況にあり、オンライン教育などのサービスを利用することが困難であると考えられる。「学習や進路への不安」については、40%以上の子どもが学習に関することを回答しており、受験生（高校3年生）の68.4%が進路や進学に関することを心配事に挙げていた。「子どもの声」の記述には、「塾が閉校して、どう勉強したらいいかわからない」「いつになったら元の生活に戻れるかが不安」「自営業でお客さんが来ない日が増えて不安」といった回答がみられた。

## (2) コロナ禍の学校

日本での新型コロナウイルスの感染が初めて確認されてから、約2か月後、首相から全国の小学校、中学校、高等学校等、特別支援学校に臨時休業の要請が出された。この要請に法的根拠はないが、感染者の増加を抑えるために出されたものである<sup>3)</sup>。はじめは、2020年3月2日から春休みが始まるまでの臨時休業の要請だったが、感染者の増加、緊急事態宣言が発令されたことにより、臨時休業の期間も延長されていった。「新型コロナウイルス感染症対策のための学校における臨時休業の実施状況について(文部科学省)」によると、2020年5月11日の時点で86%の学校で臨時休業を実施していることが分かる。

【表】5月11日現在臨時休業を実施している学校の割合(全国)

	公立	国立	私立	合計
幼稚園	77%	84%	69%	73%
小学校	88%	90%	90%	88%
中学校	88%	90%	92%	88%
義務教育学校	87%	100%	100%	88%
高等学校	90%	93%	88%	89%
中等教育学校	100%	100%	88%	96%
特別支援学校	90%	82%	60%	89%
専修学校高等課程	80%	0%	82%	82%
計	87%	87%	76%	86%

(※) 表中の割合は、回答があった学校数全体のうち、「11日現在、臨時休業を実施している」と回答のあった学校数の割合を示す。

(※) 私立については、東京都、福岡県が未回答となっている。

公立の幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校における「特定の学年・学級の臨時休業を行っている学校」は3,029校、「学校全体の臨時休業を行っている学校」は186校となっている(2022年3月9日現在)。

## (3) 新型コロナウイルス感染症が及ぼす子どもへの影響

ユニセフは、「新型コロナウイルスの子どもへの影響」として、次の4点を取り上げていた<sup>4)</sup>。

第1に、教育についてである。世界190カ国、約15億人の子どもや若者が学校の休校によって学習の機会を失ってしまった。多くの地域でタブレット端末等を用いた遠隔授業が行われていた。しかし、全ての子どもが遠隔授業を受けられるわけではない。貧困世帯や低速で高価なインターネットサービスを利用する国の子どもは、遠隔授業に必要な端末や快適なインターネット環境を整備できない。

第2に、栄養面についてである。学校が休校になり、給食を頼りにしていた約3億6800万人の子ども達が日々の栄養を摂取できずにいる。また、急なロックダウンによって市場が混乱し、食品が手に入らないという最悪の事態も想定される。

第3に、家庭とオンラインの安全についてである。学校が休校になったり、外出が制限されたりすることで、家で過ごす時間が増える。そうすることで家庭でのストレスレベルが上昇し、家庭に閉じ込められた子どもは家庭内暴力や虐待の被害者、目撃者になりうる。未成年者の妊娠の増加も懸念されている。ネットトラブルの増加も懸念される。子ども達の遊びや学習をサポートするインターネットは、とても便利なものである。しかし、ネットいじめやネット上での危険な行動、性的搾取の可能性もあると考えられる。

第4に、子どもの健康への影響である。新型コロナウイルスの感染者が増加し、医療体制が崩れてくると、日常的に医療的ケアを必要とする子どもたちが通常のケアを受けることが困難になってしまう。また、失職や収入が減少している世帯では、生活に不可欠な医療費や食費の削減を余儀なくされ、特に子どもや女性、授乳中の母親に影響を与えている。

このような生活への影響が大きいなかで、子どもたちが生活を営むためには、自らの生活力を身に付けることも必須と考える。

### 3. 小学校家庭科と生活力

#### (1) 小学校家庭科

小学校家庭科は、5学年と6学年で学ぶ教科である。「なぜ、5年生からしか学べないのか」という子どもたちの疑問が毎年繰り返されている。その理由については、家庭科教育史研究に詳しい。ここでは、2つ挙げておきたい。

1つは、「民主的な家庭建設ができるようにすることを目指した教科」<sup>5)</sup>として民主的な人間関係が理解できる年齢が必要であること、2つは生活に関する知識・技能の実践に向けて他教科の学びの蓄積のうえに成り立つことを挙げておきたい。民主的とは「どんな事でも一人ひとりの意見を平等に尊重しながらみんなで相談して決め、だれでも納得の行くようにする様子」(新明解国語辞典)であり、自己理解と他者理解が前提となる。成長発達段階からの理由が1つである。もう1つの理由は、いろいろな教科等で学んだことを日常生活と結びつけ実感する機会を提供する教科としての家庭科の特徴がある。小学校家庭科の学びは、自らの生活力を身に付けるプロセスの基盤となっている。

「10歳の壁」<sup>6)</sup>という点からも小学校5年生から家庭科が始まることの意味は大きいのではないだろうか。

#### (2) 生活力とは

『広辞苑』(第六版、岩波書店)によれば、生活力とは「社会生活に適応するための身体的・精神的または経済的能力」とある。生活力は文字通り生活するために必要な力である。文部科学省は1996年から「生きる力」をはぐくむことを理念とし、新しい学習指導要領では「変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい[確かな学力]、[豊かな人間性]、[健康と体力]の3つの要素からなる力」と表現している。

家庭科教育では、「生活実践力」という言葉も使われている。「家庭科での学びが生活で活かされる力」<sup>7)</sup>、「見出した生活の課題に応じて思考し、判断し、適切な解決方法を導き出しながら、よりよい生活をめざして主体的に行動する力」<sup>8)</sup>、「児童・生徒が自らの生活をよりよくしようとする取り組み」<sup>9)</sup>、「小学校家庭科での学びを生活の中で継続して実行し、生活をよりよくしようとする態度や技能」<sup>10)</sup>としている。

また、日本家庭科教育学会では、学会60周年特別研究委員会「未来プロジェクト」において「より

よい生活を営むために必要な生活実践力・活用力」を「生活リテラシー」と表現したのを皮切りに、学会編『未来の生活をつくる 家庭科で育む生活リテラシー』明治図書(2019)では「知識や技能を活用し、良い生活をつくろうとする力」、2018年度例会「家庭科で育成する生活リテラシーとは」では野中が「①『機能的な生活リテラシー』→自立」、②『相互作用的生活リテラシー』→共生」、③『批判的生活リテラシー』→社会参加」の3要素を示し<sup>11)</sup>、2019年度大会「未来をつくる力と家庭科における生活リテラシー」では赤塚が「Well-beingのためによりよい生活を営む力」「よりよく生きるための生活創造を実践する力」<sup>12)</sup>、「高校家庭科で育てる生活リテラシーの検討-高校生の実態調査を通して-」では「知識・技能を活用して生活の課題を解決する力」<sup>13)</sup>と定義づけが続いている。

生活力と似ている言葉にライフスキルがある。WHO(世界保健機関World Health Organization)が1997年にまとめた“LIFE SKILLS EDUCATION FOR CHILDREN AND ADOLESCENTS IN SCHOOLS”ではライフスキルの定義とライフスキルの10項目が示されている。ライフスキルとは「日常生活における様々な要求や課題にに対して、効果的に対処し、個人が適応的かつ積極的に行動するための能力」であり、「意思決定・問題解決・創造的思考・批判的思考・効果的なコミュニケーション・対人関係スキル・自己認識・共感・感情への対処・ストレスへの対処」があげられている。

また、生活スキルとして国立青少年教育振興機構があげているのが、「コミュニケーション、礼儀・マナー、家事・暮らし、健康管理、課題解決」<sup>14)</sup>である。

このように生活には、子育てやお金に関することや、衣食住に関する知識・技術だけでなく、良好な人間関係を構築したり、自分の生活を管理する能力、集団の中で周囲と協力したりする能力、情報を正しく活用する能力、環境に関する知識・技術が必要であることが分かる。

天野<sup>15)</sup>は家政学の立場から生活力について次のように述べている。「①それをしなければならない理由を誰よりも自分がよく知っているのもであり、②日々頻度高く必要となることで、多少下手であっても繰り返しているうちに適当にうまくなるのもであり、③それができることで自分の生活スタイルを自分で作り楽しむことができ、④それができること

で他の人と協力したり、他の人を援助したりする『人との関係』を育むことができ、⑤それらの総体として『自分が自分なりに人間らしく生きている』ことを自己確認できる能力』を生活力と表現している。そしてさらに「自分が日々生きていくために必要なことを自分であることができる、ということは、人間の尊厳、プライドを保つ力」とも付け加えている。

以上のことから、本稿では、生活力という言葉を使い、小学生における「生活力」を「家事・暮らしに関わる知識・技能で、小学校卒業までの家庭生活・学校生活の中で身に付くもの」と定義し、具体的な内容を次の表に示すこととする。学校生活は家庭科の授業での身に付ける生活力を想定している。

表2 小学生における生活力の具体的内容

家庭生活で身に付くもの	使った食器を流し台まで運ぶ 使った食器を洗う お米を研ぎ、炊飯のセットをする 食事の準備（調理）の手伝いをする 安全にお湯を沸かす 電子レンジ、オーブントースターを安全に正しく使う 身の回りの整理整頓を自分でする 風呂掃除をする ごみの分別をする 洗濯物を干す 着る服を自分で選ぶ 買う服を自分で選ぶ お小遣いやお年玉などを自分で管理する 一人で留守番することができる 規則正しい生活を送る バランスのとれた食事を1日3食しっかり摂る 学校の準備など外出時の準備をする
学校生活（家庭科の授業）で身に付くもの	包丁など調理器具の安全で正しい使い方 一食分の献立を考え調理する 縫い針やミシンの安全で正しい使い方 地球温暖化について知っている 環境に配慮した生活の工夫をする 自分の生活を振り返り、課題を見つけ改善しようとする 自分の生活をより良くするために考え、改善に向けて見通しをもって計画を立てる 食材に合った正しい調理方法 栄養素のはたらきを考慮した献立作成 衣服のはたらきを考慮した衣服の選択 快適な生活のために住まい方の工夫を考える 自分の消費行動（買い物など）を振り返り改善する 支払い方法の種類とその仕組みを知り、消費行動を工夫する 環境保全についての様々な取組について知り、自分の生活を改善し、環境に配慮した生活を心がける

#### 4. 保護者と子どもの家庭科への意識と実際

##### (1) 保護者の家庭科教育に対する意識

福田<sup>16)</sup>が行った調査から要点をまとめると次の

ようになる。

- ①家庭科の有用感 保護者の8～9割の人が家庭科の学習は今の生活に役立っていると回答し、小学校での家庭科の授業が役に立っているという回答が最も多かった。これは家庭科の授業が始まるのが小学校で、調理実習や縫い物など初めて経験することが多く、学習内容が印象に残りやすいからだと考える。また、9割が自身の子どもに家庭科をしっかり学んでほしいと回答していた。多くの保護者が、家庭科に有用感を感じ、自身の子どもにも家庭科を通して生活に役立つ知識・技能を身につけてほしいと思っていることが分かった。
- ②印象に残っている授業内容 調理実習と被服実習についての回答が多く見られた。これは学習者自身が体験する実習の授業であるためだと考える。次いで栄養素など食事に関する回答が多く、学習者の生活に身近な内容ほど印象に残りやすいと考えた。
- ③身に付けたかったこと 印象に残りにくい学習内容と回答がほとんど一致し、家計やお金に関することについての回答が多かった。実習の授業ではなく、学習者にとってあまり身近ではないため印象に残りにくく、身に付きにくいのではないかと考える。身に付けたかったこととして回答が多いことから、生活を営んでいくうえで必要不可欠な知識であると捉えることもできる。

##### (2) 子どもの生活力

保護者の家庭科教育に対する意識と子どもの生活力との関連性はみられなかった。しかし、子ども間の生活力の差は大きく、個人差があることが分かった。保護者の得意・不得意が個人差が生じる要因の一つであると考えられる。保護者への調査の中で「自分では教えられるから学校でしっかりと学んでほしい」という記述があった。子どもは親の姿を見て学ぶ。無意識に保護者から影響を受け、「できない・苦手」が連鎖していると考えられる。

子どもの生活力について、保護者の回答では「使った食器は自分で流し台まで運ぶ」が90%で最も多く、次いで「学校に着ていく服は自分で選んでいる」が80%で多い結果となった。小学生段階から男女差がみられる部分が散見され、家庭科の授業で身に付ける生活力の学びへの意識を高めたい。



表3 「自身の子どもができること・家庭でしていること」の割合

設問	全体 20名	女子の 保護者 12名	男子の 保護者 8名
使った食器は自分で流し台まで運ぶ。	90%	83.3%	100%
使った食器は自分で洗う。	10%	16.6%	0%
お米をとぎ、炊飯のセットができる。	40%	50%	25%
包丁を安全にを使って食材を切ることができる。	50%	41.6%	62.5%
調理の手伝いに取り組む。	40%	33.3%	50%
自分の部屋や、勉強机など身の回りの整理整頓をしている。	50%	66.6%	25%
風呂掃除をしている。	35%	25%	50%
ごみの分別をしている。	30%	41.6%	12.5%
洗濯物を干すことができる。	35%	33.3%	37.5%
学校に着ていく服は自分で選んでいる。	80%	83.3%	75%
買う服を自分で選んでいる。	50%	75%	12.5%
お年玉やお小遣いの管理は自分でしている。	45%	41.6%	50%

表4は、各設問に対して、子ども自身が「◎…よくあてはまる」「○…あてはまる」「△…あてはまらない」「×…全くあてはまらない」を回答した結果である。ほとんどの項目で「良くあてはまる」の回答率が高かった。その中でも最も高かったのは、「一人で留守番することができる」で94.7%だった。「良くあてはまる」の回答率が最も低かったのは「地球温暖化について知っていて、環境にやさしい生活を心がけている」で10.5%だった。

「できる・できない」の判断基準は子ども自身に委ねたため、同じ回答をしていてもばらつきがある。実際の子どもの生活について観察等を行うことで、より正確な子どもの生活力がわかるのではないかと考える。

また、平均が男子より女子の方が高いことから、女子の方が家庭で家事の実施率が高いことが伺える。このことは保護者の意識が反映しているのではないだろうか。

学年別にみると、家庭科をより多く勉強している6年生の方が高くなると予想していたが、結果は5年生の方が高い結果となった。原因として、コロナ禍で調理実習などの授業ができなかったからか、6年生は学習内容が多くなるからか、考察の必要がある。

表4 「自分でできること」のそれぞれの割合(全体)

設問	◎	○	△	×
①包丁を安全にを使って料理することができる。	52.6%	42.1%	5.2%	0%
②一食分の食事を作ることができる。	36.8%	36.8%	21.0%	5.2%
③安全にお湯をわかすことができる。	63.1%	21.0%	10.5%	5.2%
④ごはんを炊くことができる。	52.6%	10.5%	15.7%	21%
⑤電子レンジ・オーブントースターを安全に正しく使うことができる。	73.6%	10.5%	15.7%	0%
⑥食器を洗い、片付けることができる。	68.4%	31.5%	0%	0%
⑦着る服を自分で選んでいる。	57.8%	10.5%	21.0%	10.5%
⑧洗濯物を干し片付けることができる。	36.8%	52.6%	10.5%	0%
⑨自分の部屋や勉強机など身の回りのものを自分で整理整頓することができる。	31.5%	42.1%	26.3%	0%
⑩家事の手伝いを積極的にしている。	31.5%	36.8%	26.3%	5.2%
⑪お風呂掃除ができる。	63.1%	10.5%	15.7%	10.5%
⑫ごみの分別を意識している。	57.8%	15.7%	15.7%	10.5%
⑬地球温暖化について知っていて、環境にやさしい生活を心がけている。	10.5%	63.1%	15.7%	10.5%
⑭1人で留守番することができる。	94.7%	0%	5.2%	0%
⑮縫い針やミシンを安全に使うことができる。	63.1%	31.5%	0%	5.2%

愛知県半田市立有脇小学校では、児童一人一人に鍋や包丁、まな板を用意したり、クラスを半分に分けて交互に実習をしたりするなどの感染症対策をしながら調理実習を行っていた<sup>17)</sup>。調理器具を一人一台ずつにすることで児童が同じものを共有せずに済むが、包丁の管理などの安全管理の負担が大きくなると考えられる。また、クラスを半分に分けて交互に実習することで密にならずに実習を行なうこと

ができるが、一回当たりの調理実習の時間が半減し、十分に学習できないのではないかと考える。また、兵庫県神戸市の須磨学園では、休校期間中に動画を配信し、調理の実技について自宅学習できるように工夫をしていた。休校期間が明けてからは、調理過程ごとに担当を分けたり、調理室とは別室で食べたりするなどの対策が行われていた。調理過程ごとに担当を分けることで調理器具の共有を減らし、密にならずに調理することができるが、すべての児童が調理技能を経験することができず、学びに偏りが出てしまうと考えられる。このように様々な対策や工夫が施されているが、コロナ禍以前と同様の学びは十分にできていない。多くの制限があるなかで、十分な学びができれば工夫を考える必要がある。

### (3) 小学校の家庭科教員に求められる専門性

様々な技術が発展し、便利な物があふれている現在、子ども達に家庭科での学びの必要性をしっかりと伝えることが重要である。

小学校の家庭科の授業を担当している教員の現状を見ると<sup>18)</sup>、中学校もしくは高校の家庭科の免許を持っていて小学校の家庭科の授業を担当している教員は1割を満たしていなかった。つまり、現在の小学校家庭科を担当する教員の専門性は低いと考えられる。

小学校教員養成課程では、家庭科に関する科目の履修は必修であるが、家庭科の教科専門に関する履修科目・履修単位が少なく、調理や裁縫の実技の授業は行なわれない。しかし小学校教員全員に、家庭科の授業を担当する可能性がある。小学校教員養成課程において、家庭科の教科専門に関する履修科目・履修単位を増やし、調理実習などの実習科目の履修を推奨するべきである。

また、家庭科の授業には、実技の師範が伴う。さらに、掃除の仕方やお金の仕組み、子育てに関することなど、教科書や指導書にあるものだけでなく、教員自身の体験や知識が必要になる。変化が激しい現代の社会を生き抜く生活力がなければ、子どもの生活力を身に付けさせることはできない。教員自身が確かな生活力を持ち、変化の激しい社会に対応できるよう、常に学び続け、さらに生活力を磨き続けようとする必要がある。

全ての保護者が「自身の子どもの主要科目と同様にしっかりと家庭科を学習してほしい」と回答していた。自由記述には「生活に必要なだから」という内

容が最も多く見られたが、「家で教えることができないから」という内容もいくつか見られた。共働き世帯が増加し、子どもと過ごす時間が減少し、子どもと一緒に買い物に行ったり料理をしたりする機会が失われていると考えられる。核家族化も進み、祖父母の長年の生活の中で培ったものも傳承されにくくなってきている。子どもも保護者も家庭科の授業の必要性を強く感じており、家庭科の授業は生活力を身に付ける重要な機会であると捉えていた。

家庭科教育の基盤を担う小学校家庭科を担当する教員の専門性を高めることは喫緊の課題である。

## 5. 小学校家庭科の教材開発

生活力についてみてきたが、SDGsの目標が取り上げられているように、持続可能な社会に向けた生活の工夫や変化の激しい社会を生き抜くための情報処理能力、自己管理能力、課題発見・解決できる能力など、身に付ける生活力は複雑化している。その意味では、身近な生活を教材とする家庭科の授業を軸に教科横断的な指導や総合的な視点からのアプローチは欠かせない。家庭科の教科としての特性を発揮することが求められている。

表5 小学校家庭科の学習内容

領域	学習内容	
A 家族・家庭生活	(1) 自分の成長と家族・家庭生活 (2) 家庭生活と仕事 (3) 家族や地域の人々との関わり (4) 家族・家庭生活についての課題と実践	
B 衣食住の生活	食生活	(1) 食事の役割 (2) 調理の基礎 (3) 栄養を考えた食事
	衣生活	(4) 衣服の着用と手入れ (5) 生活を豊かにするための布を用いた製作
	住生活	(6) 快適な住まい方
C 消費生活・環境	(1) 物や金銭の使い方と買い物 (2) 環境に配慮した生活	

出典：文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 家庭編」

小学校家庭科の学習内容が表5である。A「家族・家庭生活」領域は4項目、B「衣食住の生活」領域は、「食生活」は3項目、「衣生活」は2項目、「住生活」は1項目、C「消費生活・環境」領域は2項目の内容で構成されている。この表からは「衣生活」、「住生活」、「消費生活・環境」についての項目が他と比



べて少ないことがわかる。これらの項目は、福田の調査の「印象に残っていない学習内容」と「身につけておきたかった知識・技能」と一致している。限られた授業時数の中でも、すべての領域を同程度学習できるようにしなければならない。複数の領域の学習内容を関連付けたり、他教科との連携を図ったりした横断的な学習を進めていくべきである。

初めての家庭科の授業となる5年生のガイダンスの授業で、家庭科での学習は私たちの生活全体と関連していることをしっかりと伝え、限られた授業時数の中で全ての領域を学習するためには、複数の領域を関連させた授業を展開することも必要である。

そこで、家庭科の初めての授業となる5年生で行うガイダンスの授業と、初めての調理実習となる5年生の食生活領域の授業を提案した。

### (1) 小学校家庭科ガイダンスの提案

#### 1) 題材名題材名

「家庭科」ってどんな教科？

#### 2) 題材設定の理由

家庭科の授業は、調理実習や被服実習の印象が強い。そのため、実習以外の座学の授業への関心が低く、住生活領域や消費生活・環境領域、家族・家庭生活領域の知識・技能の定着度が低い傾向にある。家庭科での学びは、私たちの生活全体と関連している、住生活領域や消費生活・環境領域、家族・家庭生活領域の知識・技能も必要不可欠なのである。

家庭科の学びの必要性について確認するためには、家庭科教育の最初となる小学校5年生の初めての家庭科の授業でのガイダンスで、「家庭科とは一体どんな教科なのか」、2年間の家庭科教育を通して「どのような自分になりたいか」について考える活動が有効だと考えた。家庭科の授業内容について予想し、実際の教科書の内容と比較することで、自分が知らなかった学習内容について気付くことができる。また、領域や生活場面ごとに分類することで、学習内容が生活全体と関連していることが視覚的に認識することができる。さらに、2年後のなりたい自分について考え、計画を立てることで2年間の家庭科教育に見通しを持ち、主体的に学習に取り組めるようになってほしい。

#### 3) 目標

- ・2年間の家庭科教育の学習内容について把握することができる。(知識及び技能)
- ・学習内容と生活場面を関連付けてまとめることが

できる。(思考力・判断力・表現力)

- ・なりたい自分に向けて2年間の家庭科教育ですべきことを考えることができる。

(学びに向かう力・人間性等)

#### 4) 指導計画(総時間数 2時間)

家庭科の学習内容を知ろう！(本時)・・・(1)  
なりたい自分になるための計画を立てよう！  
・・・(1)

#### 5) 本時の指導

①題目 家庭科の学習内容を知ろう！

②目標

小学校家庭科で学習する内容が私たちの生活全体と関連していることが分かる。(知識・理解)

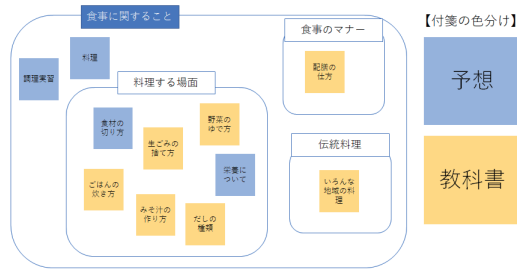
③評価(おおむね満足の様相)

○家庭科の教科書の内容と生活を照らし合わせ、生活のどんな場面で家庭科の学びが活かされているかが分かる。

④展開

学習活動 【内容・子どもの様相・めあて・発問等】	○支援及び留意点 【目標を達成するための具体策】
1. めあてを確認する。  家庭科の学習内容を	○めあてを確認することで、本時の学習の見通しが持てるようにする。
2. 家庭科でどんな学習をするのか予想する。 (1)予想内容を付箋に記入し、内容ごとに分類する。 (食事に関すること) ・栄養素について ・切り方や料理の仕方 ・調理実習 (裁縫に関すること) ・ミシンの使い方 ・ナップザックを作る ・縫物をする	○予想することで、自分が思っていたことと実際の学習内容が違っていることが分かるようにする。 ○分類することで生活のどんな場面と関係しているかが分かるようにする。
3. 教科書を見ながらどんな学習をするのか、どんな力が身に付くか付箋に書き、分類する。	○内容ごとに分類することで、予想の段階では出てこなかった分野があることが分かるようにする。
4. 活動2の予想と活動3の予想を比較し、感想や気になった内容を共有する。 ・いろんな勉強をすることに驚いた。 ・一人暮らしの時に役立ちそう。	○活動2の付箋と別の色の付箋を用いることで、予想との違いが分かるようにする。 ○予想と結果を比較することで、家庭科の学習内容の幅広さに気付けるようにする。
・食事や裁縫だけでなく私たちの生活すべてに関係していると思った。	
5. 2年間の家庭科の学習を通して何を身に付け、どんな自分になりたいか理想像を描く。 ・自分で栄養バランスを考えた食事を作れるようになりたい。 ・お金を無駄遣いしないようになりたい。 ・家族のためにいろんな手伝いができるようになりたい。	○家庭科の学習をした2年後の自分を想像することで、2年間の家庭科の学習に見通しが持てるようにする。

## 活動例



小学校家庭科の学びは子どもの生活力の形成におけるプロセスにおいて基盤ともなる位置にある。

これまでの生活を振り返り、「してもらう自分」から「する自分」「できる自分」に変化していく、その最初の最初にこのガイダンスが位置づく。そして、家庭科の学びが進むにつれて、家庭生活で身につく生活力とともに、いろいろな生活の営みがあり、生活技術があり、人間関係があることを知り、知識や意識や技術を実際の生活に生かす行動につながる。子どもが身に付ける生活力についての探求を今後も深めたい。

## 参考文献

- 1) 子どもの貧困対策センター 公益財団法人「あすのば」「コロナ禍と子どもの貧困」[https://www.jssw.jp/wp-content/uploads/gakkaikikaku\\_68\\_04.pdf](https://www.jssw.jp/wp-content/uploads/gakkaikikaku_68_04.pdf) (2021年12月10日閲覧)
- 2) 公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン「新型コロナウイルスの影響を受けた生活困窮世帯の子どもに関する調査報告書」2020
- 3) 朝日新聞デジタル (2020年2月27日)「首相、全国の小中高校に3月2日からの臨時休校を要請」<https://www.asahi.com/articles/ASN2W652BN2WULFA03L.html> (2021年12月10日閲覧)
- 4) unicef「新型コロナウイルスの子どもへの影響教育・栄養・暴力・健康」国連による新報告書(2020年4月16日発行)(2021年12月10日閲覧)<https://www.unicef.or.jp/news/2020/0088.html>
- 5) 文科省：国際教育協力懇談会資料集「我が国の教育経験について〔家庭科教育〕」2002
- 6) 渡辺弥生『子どもの「10歳の壁」とは何か？—乗り越えるための発達心理学』光文社2013
- 7) 西敦子『生活実践力を育成する家庭科授業の創造』明治図書出版2005
- 8) 多々納道子・福田公子『教育実践力をつける家庭科教育法』大学教育出版2005
- 9) 渡瀬紀子・長澤由貴子「児童・生徒の「生活実践力」はどう変わったのか：東北地方における調査をもとに」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』13,99,2014
- 10) 西江なお子「生活実践力の育成を目指した小学校家庭科モデル開発に関する研究—実感を伴った理解へと導く体験的活動を通して—」『奈良学園大学紀要』5, 134, 2016
- 11) 野中美津枝「高校生の生活リテラシーの状況と家庭科で育成する生活リテラシーの検討」『日本家庭科教育学会誌』62 (1) ,51-52,2019
- 12) 赤塚朋子「学会が提案しようとしている生活リテラシーとは何か」『日本家庭科教育学会誌』62 (3) ,196-197
- 13) 野中美津枝ほか「高校家庭科で育てる生活リテラシーの検討」『日本家庭科教育学会誌』64 (4) ,256-257,2022
- 14) 独立行政法人 国立青少年教育振興機構「子供の生活力に関する実態調査～子供に必要な生活スキルとは～」報告書 概要 2015
- 15) 天野寛子「家事労働・家事様式と生活技術・生活文化」日本家政学会編『家庭生活の経営と管理』朝倉書店、1989年
- 16) 2021年度卒業論文「小学校家庭科に求められる学び」
- 17) 日本経済新聞「実食は別室／動画見て自習 調理実習、コロナで創意工夫」2021.2.16 <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOFD018AT0R00C21A2000000/> (2022年1月4日閲覧)
- 18) 岡陽子ほか「課題解決能力を育む家庭科の指導の現状と課題—佐賀県と広島市の小学校家庭科担当教員の指導状況の分析から—」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』4,18-29, 2020

令和4年4月1日 受理



# Elementary School Home Economics Education and Living Ability

Tomoko AKATSUKA, Mayu HUKUDA